

保育者養成のための科目「乳児保育」の指導法

—小麦粉粘土を用いた活動からの考察—

安田 華子*

Teaching Subjects for Training of Nursery Caregivers "Infant Care" — Consideration from Activities with Flour Clay —

Hanako YASUDA

1. はじめに

現在は、少子化ということもあり兄弟がおらず、一人っ子である場合が増えてきている（図1）。また、子どもが外で元気よく遊べる場所が減ったことで、身近で子どもを見る機会も減ってきているのが現状である。

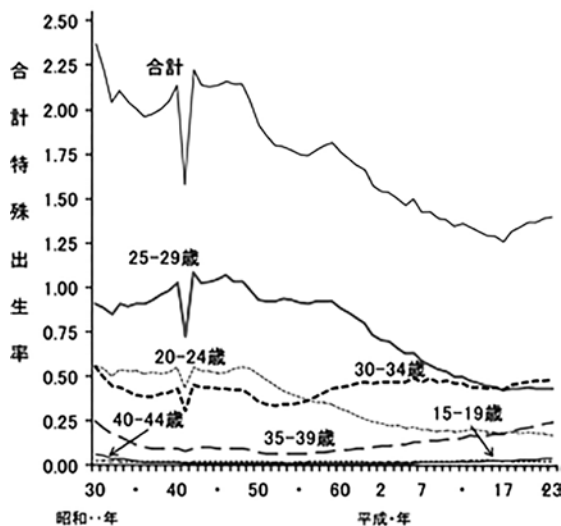


図1. 合計特殊出生率（出典：厚生労働省）

そのため、保育士を目指すきっかけとなる赤ちゃんをあやす経験や、小さい子どもと触れ合うという経験をしたことがないまま保育士を目指す学生が増えてくると考えられる。

こうした現状の中で、保育者養成のための科目「乳児保育」では、より質の高い保育者を育成するために、どのような授業展開を行い、講義・演習を組み立てていけばよいかを考える必要がある。「乳児保育」は、保育士の特性である0～18歳の児童を保育する中で、特に保育士が関わる0～2歳の理解、保育士の役割を学ぶための必須科目として位置付けられている。演

* 非常勤講師

習科目に指定されており、実践を交えながら乳児への理解を深めていく科目である。特に、乳児は身体的発達や精神的発達が著しい。そのため、人間の基礎を担う時期と言える。また、「子どもの保健Ⅰ・Ⅱ」「保育実習指導Ⅰ・Ⅱ」と関連をしながら身体的・精神的発達や乳児と関わる際に必要となる沐浴や授乳を体験的に学び、一人ひとりに合う保育を見出していかなければならない。よって、N大学2年生とN専門学校2年生を対象にして乳児についてのイメージアンケートを行い、また、小麦粉粘土を使用した保育活動を考えさせ、学習対象者の違い、実習経験の有無を含め、「乳児保育」という授業課題を検討する。小麦粉粘土をテーマに挙げた理由としては、小麦粉粘土は、乳児が誤って口に入れてしまっても害がなく、柔らかさを調節できることから、保育の現場では、よく使用されている。最近では、市販もされており手軽に遊べるものとなっている。

2. 調査方法

(1) 「乳児保育」科目履修前における、乳児のイメージについての自由記述による質問調査を行う。

N大学2年生150名、N専門学校2年生20名に対し、乳児(0～2歳)におけるイメージを自由記述にて実施した。

(2) 授業内で、小麦粉粘土を使用した「保育指導計画」の立案。
実際に実習にて使用されている様式を簡略化し使用(環境設定・子どもの姿・保育者の援助)した。

①N大学2年生は、保育実習Ⅰ(保育所)終了後に行った。

②N専門学校2年生は、保育実習Ⅰ(保育所)実施前に行った。

保育実習Ⅰ(保育所)では、目標として保育所の役割や機能について理解し、観察や子どもとのかかわりを通して子どもの理解を深めること、保育士の業務内容や職業倫理について学ぶことである。実習内容としては、実際に子どもと関わることで、子どもの発達過程の理解を深め、保育内容に応じた保育の仕方や環境設定を観察し、子どもたちの健康や安全をどのように確保しているかを学ぶものである。実習期間は、10日間かつ80時間以上と決められており、とても短い期間での実習となる。実習内容は、観察実習により子どもと保育士、保育の関係を知り、参加実習として、自ら子どもたちに関わり、コミュニケーションの取り方や保育の仕方を考察・実践することある。

3. 調査対象

(1) N大学2年生150名

本年度20歳になる学性

(2) N専門学校2年生20名

子育て中の学生2名、男性6名、本年度20歳になる学生3名、残る学生は、他大学卒や社会人経験者であり、年齢層が幅広いという特徴がある。

4. 調査内容

(1) 乳児のイメージ質問調査

①入学前に乳児を抱っこしたり、あやしたりかかわったことがあるか

②「乳児保育」履修前の乳児のイメージ

(2) 小麦粉粘土を使用した「保育計画」

- ①乳児の姿・乳児が行う製作部分
- ②環境設定
- ③保育者の援助

5. 結果

(1) 「乳児保育」科目履修前における、乳児の自由記述による質問調査にてN大学2年生とN専門学校2年生が抱えている乳児のイメージをまとめていく。

①入学前に乳児を抱っこしたり、あやしたりと関わったことがあるかどうかの質問結果として、N大学2年生の80%があると答えた(表1)。この中には、家族・親戚などの乳児のみのかわりも含まれていた。N専門学校2年生では、わずか25%のみ乳児と関わったことがあるとの回答を得た。N大学2年生とN専門学校2年生が、乳児とかかわったことがあると回答した最も多い理由は、家族・親戚などの乳児とのかわり、中学校・高校での体験学習で保育所を訪れた時の関わりというものであった。関わったことの無い学生の中でも、乳児を見かけたり、あやす姿を見たことはあるとの回答であった。

表1. 入学前に乳児とのかかわりの有無

学校名	ある	なし
N大学2年生	120名	30名
N専門学校2年生	5名	15名

②「乳児保育」履修前の乳児イメージ(表2)に関しては、「何を考えているかわからない」「コミュニケーションが難しそう」「寝ていることが多い」「泣いている」「一人では、何もできない」など、マイナスイメージが多くあった。良いイメージでは「かわいい」「癒される」「さわり心地がいい」という意見が多くあった。乳児(0~2歳)のイメージでは、養育者の手を借りないと何もできず、常に見守りが必要であり、寝ている時間もあるため、乳児はゆっくりとした1日を過ごしていると考えられている。また、乳児は養育者や保育者に何をしてほしいのかを泣くことで伝えるため、乳児の気持ちをくみ取り、どのように養育者や保育者が適切な援助をしているのかが不思議であり、自分たちが適切に援助できるのかを不安に思っている学生がほとんどであった。

表2. 「乳児(0~2歳)」のイメージ(複数回答)

イメージ	N大学2年生(150名) %		N専門学校2年生(20名) %	
何を考えているかわからない	100	60	18	90
コミュニケーションが難しい	127	84	19	95
寝ていることが多い	110	73	15	75
すぐに泣く	148	98	19	95
かわいい	150	100	20	100
触り心地がいい	147	98	16	80
笑顔	122	81	15	75
守るべきもの	150	100	20	100

手がかかる	148	98	20	100
怖い	120	80	4	20

(2) 小麦粉粘土を使用した「保育指導計画」では、N大学2年生とN専門学校2年生の違いをまとめていく。

保育指導計画とは、現在の乳児の姿を理解したうえで、乳児に何を体験して欲しいのか、何を感じてほしいのかを踏まえ、保育の活動を設定することである。その中で、保育の進め方を考え、乳児の予想される姿を想像しあらかじめ対応方法を考えておく必要がある。その後、保育活動の試作品を製作することにより、実際に乳児が行う時に、流れはスムーズであるか、気を付けるべき点はどこなのかを明確にしていく。その上で、保育指導計画だけでなく頭の中でも保育を行うイメージ作りが行えるものである。

①乳児の姿・乳児が行う部分

N大学2年生は、保育実習Ⅰ(保育所)が終了しているということもあり、保育の時間が短いこと、乳児が行う活動は、単純かつ数ヶ所であることから、乳児の集中力がどのぐらい持ち、乳児がどのような活動ができるのか、しっかりととらえ計画を考えることができていた。そのため、乳児が行う行動は、一つに絞られていた。例えば、小麦粉粘土をいろいろな色に染めておき、ビザに見立てた上に色つき小麦粉粘土を振りかけることや、小麦粉粘土の上に手形をとるなど、保育者と一緒に行え、短時間でできあがるものを考えていた。N専門学校2年生では、子育て中の母親以外、小麦粉粘土を細長く丸める。平らに伸ばしたものを巻き、クロワッサンにするなど、細かい作業を組み込んでいる学生が多く見られた。保育実習などで保育を体験する以外での乳児のかかわり、例えば、子育てや中学校・高校での体験実習だけでは、乳児の発達がきちんと理解できておらず、細かい製作も時間をかければできると考えていることが読み取れる。このことから、保育実習で保育を経験した後は、各年齢の発達段階が理論と一致し、乳児の発達の流れが理解できるようになっていることがわかる。子どもの姿についても、実習前のN専門学校2年生では、「泣いてしまう」「やろうとしない」などマイナスイメージが多く、乳児ができることや乳児がどのように動き、どのような反応をするか文章にすることができていなかった。N大学2年生は「小麦粉粘土が手についてしまい、泣いてしまう」「粘土をビザの上に並べる」「できたねと拍手をすると、一緒に拍手をして喜ぶ」など子どもの行動が、具体的に記入できていた。

②環境設定

保育指導計画の環境設定では、乳児が保育をしやすい環境をあらかじめ考え、保育がスムーズに行えるようにするものである。保育室や園庭など、乳児が行く場所の環境をすべて考え、けがや事故を防ぐためにも必要なものである。

N専門学校2年生の環境設定では、製作する机上の環境のみを考える学生が多く、製作を待っている、あるいは終わってしまった乳児についての環境は考えられていない部分が多くあった(図2)。一方、N大学2年生では、机上の環境はよく整理されており、さらに、製作スペースと遊ぶスペースの間に柵などを置き、製作中の乳児の気が散らないようになっていた。また、待っている、あるいは終わってしまった乳児がゆっくりとできる遊びのスペースを準備していた。製作をする場所と待っている、あるいは、終わってしまった乳児が遊ぶ場所の間は、柵で目隠しをされており、お互いが見えない状態になっているが、行き来がしやすいようにも考えられていた。(図3)。

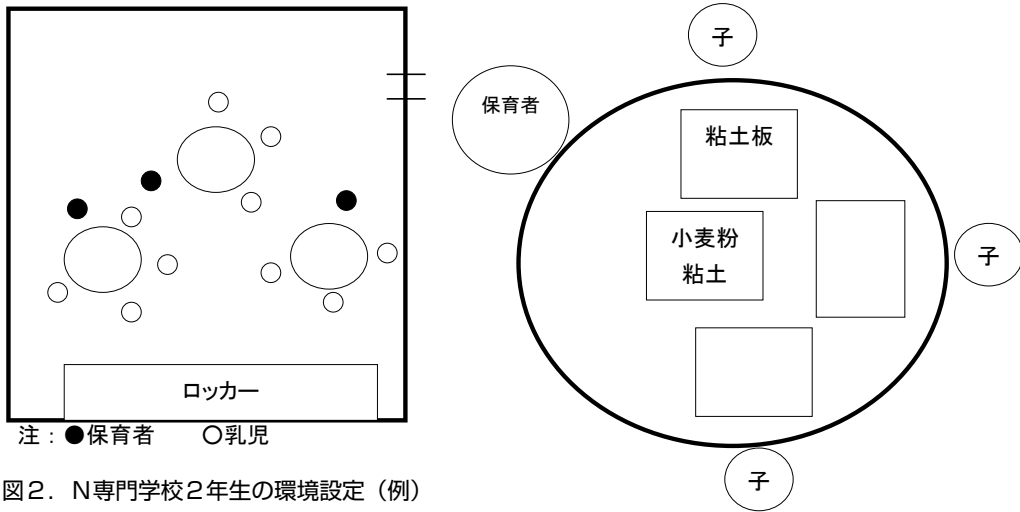


図2. N専門学校2年生の環境設定(例)

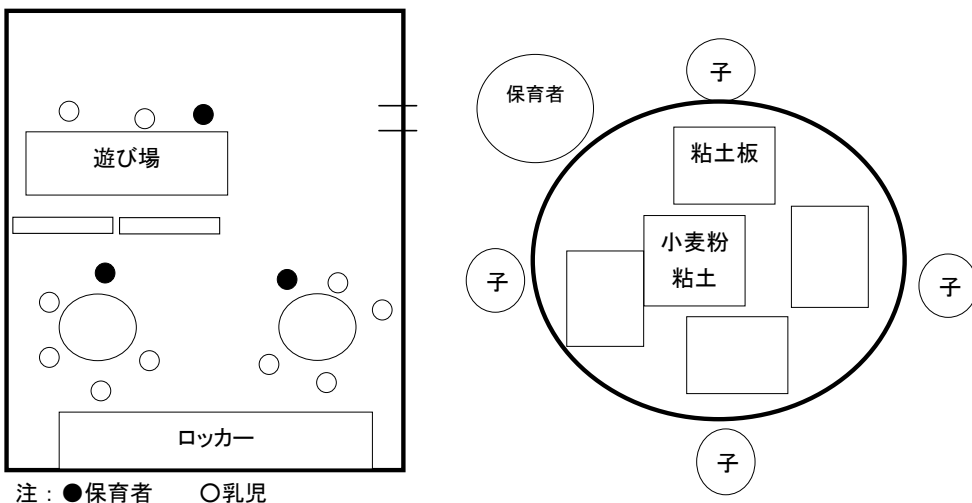


図3. N大学2年生の環境設定(例)

③保育者の援助

N専門学校2年生では、保育者が主導権を握り、子どもの行動を制限するような表現が多く、「小麦粉粘土を渡し、こねるように伝える」「小麦粉粘土を伸ばすために、上からギュッと一緒に押さえる」など、保育者対乳児1名での関わりとなっている。N大学2年生では、小麦粉粘土を渡し、「パラパラしようねと声をかけ、保育者も子どもに見えるように行う」「うまくできない子には、一欠片ずつ渡し、ピザの生地におけるよう、生地に印をつける」など、全体の乳児に当てはまる状況や細かい具体的な対応が記入できるようになっていた。

6. 考察

今回の質問調査の結果から、入学前に乳児と関わったことがあるといっても、その内容は、

いろいろであり、ほとんどが、短時間の関わりということが分かった。そのため、乳児の特性や発達、講義の中で初めて知るという学生が多い。しかし、発達には個人差があり、それを伝えていくには、言葉だけで表すことは容易なことではない。授業では、一般的な発達段階を心理的側面、身体的側面を交えて教えている。その上で、個人差があり、生活年齢と発達年齢が合わなくても、子どものペースに合わせて援助をし続けることが大切と教えている。しかし、実際に実習から戻ってきた学生に、「乳児だけでなく、幼児もあんなに個人差があって、できる子とできない子の差が多いとは思わなかった。」「どの子のレベルに合わせ、保育を設定していいのかわからなかった。」との声を聴いた。授業を受け、子どもの発達や特性を理解したと思っても、それを実際の子どもの姿に置き換えられず、実習で子どもと関わることで、文字をうまくイメージに変更できていなかったことがわかった。実習では、実際に子どもたちを観察し、関わることで少しずつではあるが、子どもの姿が頭の中や感覚で理解しインプットされていくと考えられる。また、保育士が子どもの状態により臨機応変に対応する姿や、さまざまな援助方法を目の当たりにし、保育士の援助の意味や行動を頭の中で子どもの姿と結びつけ、イメージができるようになっていくのだと感じた。学生にとって、黒板を使っただけの講義だけでは、文字を覚えることが精一杯であり、実習のような体験学習で、乳児に関わりながら学ぶことで理論と実際を結びつけられると考えられる。よって実習はとても大切なものであり、その体験は、今後の授業内容の幅を広げるものと考えられる。10日間という短い間であるが、乳児に関わったことのない学生たちにとっては、実習はとても必要な時間であることがわかった。

乳児のイメージについては、履修前に行った質問調査より「何を考えているかわからない」「コミュニケーションが難しい」などマイナスイメージが多くあった。原因として考えられることは、乳児にかかわった経験不足があげられる。そのため、学生にとっては、未知の領域であり不安の大きい授業内容だと考えられる。授業では、講義形式だけでなくDVDなど視聴覚教材を取り入れながら、乳児の姿を知らせていくことが必要だと考える。また、乳児期の発達をしっかりと理解できるようにし、一人では、生きていけない、あるいは、乳児自身だけでは、不完全な生活をどのように保育士が援助し、成長を促していけるのかを考えていけるようにしなければいけない。そのために、乳児保育の必要性や子ども理解の仕方、安全で情緒の安定を保てる環境設定、保育士の援助の大切さを学べるようにしなければいけない。そして、学生が乳児に関わりたい、関わってみたいと思えるように乳児保育の面白さ、魅力を感じられる授業構成を考えることが必要になる。

それと同時に、小麦粉粘土など実際に保育活動で使用している内容を、実習前に学生に知らせていくことの大切さを感じた。小麦粉粘土を用いた「保育指導計画」から見て、実習体験の有無の違いは、乳児に何を行わせるのかという部分での差異が大きく表れた。N大学2年生は、乳児の目線に立ち活動部分を設定していたが、N専門学校2年生は、乳児のイメージができておらず、大人目線のままで、乳児の活動部分を設定していた。このままの「保育指導計画」を実行した場合、N専門学校2年生は、乳児主体でなく保育士主体の保育になってしまい、乳児にさせているという強制的なものになってしまう恐れがある。そのため、乳児の目線から物事を見て感じられる体験が必要になる。実習前の授業では、学生が行える行動を制限し、乳児と同じ発達状況を作り出し、製作や遊びを行うなどの演習を行うほか、実際に使われている「保育指導計画」を提示し、それに沿った疑似保育を行う機会を増やしていくことで体験することが有効だと考えられる。また、実習前に実際の乳児が行える活動を知らなければ、実習に行き

乳児との遊びを共有できないことも考えられる。乳児の遊びの発展の仕方や、どこまでの製作活動ができるのかを知っておくことで、参加実習時に乳児の援助がスムーズに行え、乳児のやれることを奪い、発達を遮ることがなくなる。反対に、やれるまで待つという選択ができ、子どもの発達を見守ることもできるようになる。実際の保育活動を知り実習に臨むことで、いろいろな場面での乳児への援助が考えられるようになる。

環境設定では、乳児が安全に過ごせる場所の確保ができるように、授業でも様々な保育場面を取り上げながら、実際に事例を使い保育室内や園庭での環境を図に描かせ指導を行っていた。しかし、安全を確保することに集中し、何もない環境を作り出してしまい、教材や玩具の準備不足が目立っていた。また、乳児の探索行動が理解できておらず、いろいろなものが同じ保育室内に散乱しているケースも多く見られた。例えば、ブロックの横にそのまま積み木を置く。少し離れたところに絵本を出すなどしていた。この状況を実際の保育で行うと、乳児は目についたものに興味を持ち、遊びの内容がすぐに変わってしまい継続的な遊びを確保できなくなってしまう。しかし、実習後のN大学2年生の「保育指導計画」を見ると、遊びの内容が異なるもの間には、柵を使用し目隠しがされており、乳児が満足するまで一つの遊びに集中できる環境設定ができていた。また、目隠しが次の活動への導線にもなっており、乳児が迷わず活動ができるようになっていた。このことから、講義で環境設定の必要性を伝え、想像から環境設定を描かせるよりも、実際に活動ごとに変わる環境を、保育実習で観て肌で感じたり、保育者と一緒に環境を作り出していったりと実践をするほうが、環境についての気づきが多くなり、いろいろな保育活動に応用ができるようになることがわかった。

今回の質問調査や保育指導計画をN大学2年生やN専門学校2年生に行き考察をしたうえで、「乳児保育」の指導法と授業構成を考えまとめていく。

(1) 初期の「乳児保育」の内容として、なぜ、乳児保育が必要になったのか、乳児とは何かという基本理念の部分を行うことはもちろん、乳児の発達をしっかりと学び、何がどのくらいできるのかを考える必要がある。そのためには、実際に、乳児保育を行っている保育所や乳児院・託児所に見学・ボランティアに行くことが効果的だと考える。また、実際の子どもの動きを知るために、乳児(0～2歳)に関する映像学習も必要になると感じる。また、保育士が保育所にて行うことを演習として、子どもの保健Ⅰ・Ⅱ、保育実習指導と連携を取りながら、赤ちゃん人形を使用し、沐浴・おむつ交換・授乳を体験させていくことが大切だと考える。

(2) 実習後の「乳児保育」では、実習で学んできた技術や、環境設定、保育者の援助をクラス全員で共有し、より、乳児保育の必要性を深めていくことが大切である。保育所によって、保育理念が異なり子どもをどのように育てていきたいかの目標が異なっていること、地域性を含めた保育、例えば、自然が多い地域では、春に咲く花を摘みに行く、秋に落ち葉を拾いに行くなど保育活動に取り入れるなど、地域の特性を利用し保育園のカラーを出している。そのため、同じ年齢の保育であっても、保育活動や保育指導計画は同じものは存在しない。実習を振り返り、数年後の自分が読み返したときや、人が読んでもわかるようにまとめることによって、自分のなかでの乳児保育の基盤ができていくと考える。また、他学生のまとめを聴く中での気づきや発見は、刺激になり次回の実習の焦点にもなりうる。そして、実習にて乳児に触れ合えなかった学生も、こうした話し合いに参加することで、乳児の姿や保育者の援助を思い浮かべられるようになると思う。

(3) 後期の「乳児保育」では、実習や、講義、体験演習を踏まえて、乳児の発達をまとめることが重要であると思う。乳児を中心に、どのような保育をつくっていくのか、どのような

環境が必要なのか考える根底には、クラスにいる乳児の月齢が常に関係してくる。そのため、乳児保育では、子どもの発達を踏まえた、各段階の保育、保育者の援助、環境構成などを同時に行っていく必要があることを改めて感じた。そのためには、いろいろな角度から物事を観察し、子どもの、言葉にならない気持ちをくみ取れるようになる必要があると考える。

7. まとめ

今回は、N大学2年生と、N専門学校2年生のアンケートや保育計画を中心に考察を行った。ただし、このアンケートを始めたことや、保育計画の違いを見比べたのは、今回が初めてである。そのため、大学と専門学校、年齢の差などがどのように関係をしているのかまでは、見出すことができなかった。しかし、保育実習にいき、実際に保育に参加し、関わってくると、環境や保育者の動きなど細かい部分を発見し、その意図を尋ねたり、自ら同じ行動をしたりしながら、多くを学んでくることが分かった。そのため、実習後の「乳児保育」はより現場で得た技術や気づきを引出し、乳児だけでなく、その周りにある物的環境や人的環境などにも目を向け、乳児の発達を総合的に考えられる授業にしていかなければならない。そのためには、実習に行く前に、乳児の発達段階・発達過程をより細かく伝え、体験・映像学習を取り入れていく必要があることが分かった。今後も、乳児と関わったことの無い学生が、保育士を目指し入学してくることが予想される。そのため、乳児との触れ合いが持てないことが、保育士養成の中で、乳児とのコミュニケーションが取れないなど大きな問題にもなりうる。そのために、授業では、赤ちゃん人形を使用した演習や、疑似保育、乳児の目線で物事を考え行動する機会を増やしていくことが必要となる。また、保育実習で、実際に乳児に関わり、保育士の援助を観察し考察していくことで、学生自身が自分で行える援助方法を見出していくことが大切になる。

今後も、「乳児保育」という科目をどのように構成し指導を行うことで、学生にとってより良い学びとなるのかを実践しながら考えていきたい。

文献

- 1) 船越 利代子：「乳児保育」授業における課題：保育所実習アンケート分析から、つくば国際短期大学紀要 (38), 1-5 (2010)
- 2) 萩野 ミドリ：保育者養成校における「乳児保育」の意義と理解－わかる授業を目指して－、久留米信愛女学院短期大学研究紀要33, 71-76 (2010)
- 3) 厚生労働省：平成23年人口動態統計月報年計（概数）の概況：結果の概要
結果の概要 2 出生 (2) 合計特殊出生率
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai11/kekka02.html#k2_2
平成25年11月13日